

図-3は、調査地域における東側BP.1-Aと西側BP.2.の代表的な海浜断面変化をグラフに表わしたものである。東側のBP.1-BP.1-Bまでは、汀線から標高7mぐらいまで顕著な浜崖が形成され、1993年以降急激な侵食が起こり、標高3m以上の所で最大20m以上の後退が見られた。調査地域のほぼ中央では、BP.2.の断面変化にも見られるようにやや侵食傾向である。

図-4は、測量範囲の海岸を3箇所に分けて、汀線から海浜変化が起こっている標高までの海浜土量を求め、1993年7月を基準としグラフに表わしたものである。BP.0-A~BP.1-Bの範囲では、1995年4月までには約10m³/mの侵食が見られたが、その後護岸の建造によって安定している。BP.1-C~BP.2-Cの範囲では、ほぼ侵食傾向で、1993年7月から1995年10月にかけて約40m³/mの土砂の流出が見られた。BP.2-3~BP.3の範囲では、安定傾向が見られた。総合的には、1993年7月から1994年4月にかけて堆積傾向の後、侵食と堆積を繰り返しながら、平均的には、左下りの侵食傾向にある。

図-5は、海岸断面測量行った各測点の前浜と後浜の、中央粒径(d_{50})をBP.1を0として場所的な変化で表わしたもので4年間の結果である。前浜では場所的に変化が大きく、かなり大きな粒径の場所もあった。後浜では、東側から西側に行くに連れて粒径が小さくなる傾向が見られた。このことから、長期的な漂砂の卓越方向が東から西であると考えられる。

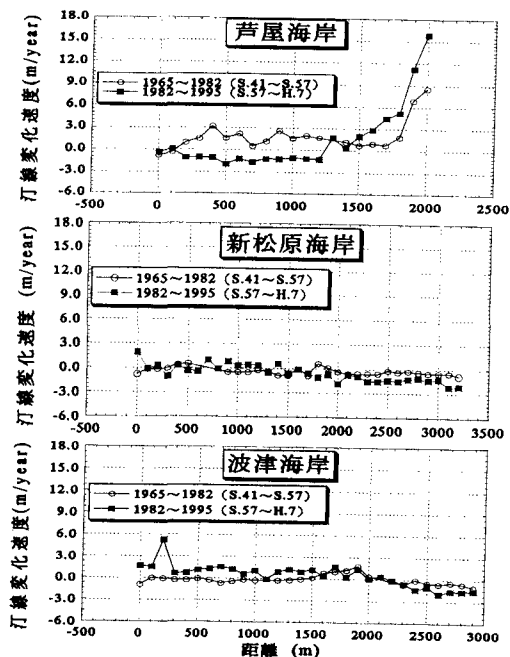


図-2 場所的な汀線変化速度

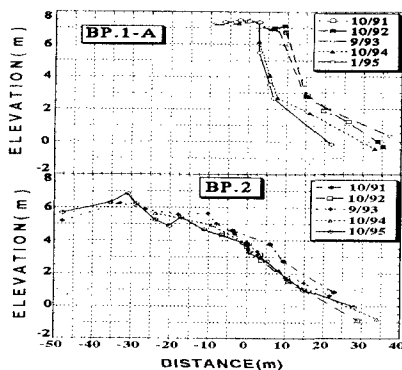


図-3 海浜断面変化グラフ

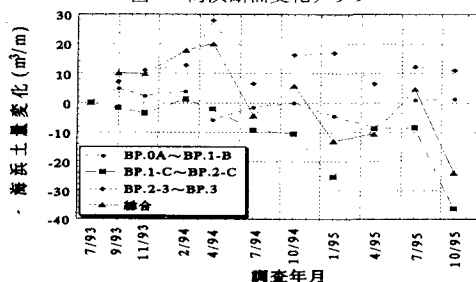


図-4 海浜土量変化グラフ

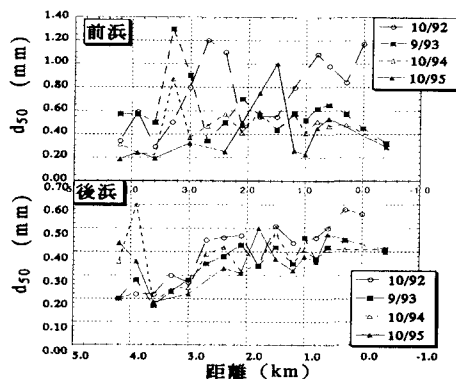


図-5 中央粒径の場所的な分布

4. あとがき

以上の調査結果から、海浜変化の傾向は、長期的には芦屋海岸の東端で著しい堆積傾向が見られたが、他の所ではゆるやかな侵食が安定していた。短期的には、芦屋海岸における西側で大きな侵食が見られ、底質調査による漂砂の卓越方向とみなされる東から西に対応して、その侵食傾向が西方向へ移動する傾向が見られた。また、海浜土量でみると調査地域の海岸は、全体的に侵食傾向にある。